

# 高山の文化を高めた人々

33

## 書道教育に情熱を燃やした 中川飛洲

池之端甚衛

私の妻（絃州）の父、中川飛洲（本名・長五郎）は、肩幅の広いがっちりした体躯に、強い意思を表わす角張った顎、鼻下には威厳のある髭をたくわえ、近寄り難い雰囲気をもっていました。眼鏡越しに覗く眼差しは優しく、他人を「叱る」という人ではありませんでした。

明治三十六年（一九〇三）二月、大野郡上枝村八日町（現・高山市八日町）の農業・秀之助の長男として生まれた飛洲は、父の農業は継がずに教職の道を目指すことにしました。

大正十三年、斐太実業学校（現・県立飛騨高山高校）に併設の実業教員養成所を卒業

し、高山西尋常高等小学校訓導、古川国民学校教諭などを勤めたあと、小学生の頃から得意だった書道を生かそうと書道教師を志し、独学で文部省検定（文検）試験に挑戦し、十年がかりで高校教員の書道二級免許を取得しました。

書道教師として、益田農林学校（現・県立益田清風高校）に赴任して八年後の昭和二十四年に、県立高山高校（現・県立飛騨高山高校）へ転任し、この年に設立された飛騨書道連盟に加わり、後に理事長に推されました。

これを契機として飛洲は、いわゆる書の作家というよりは、書道教育、学校習字の普及、更には、地域社会で書道を学ぼうとしている人達の書道の指導に徹することになりました。

飛騨書道連盟では、飛騨の小・中学生を対象にした「全飛騨習字大会」を二十五年間にわたって開き、その都度三十数校の参加があり、出品作品も毎年三千点にのぼりました。

飛洲は、飛騨の県立高校四校で書道教師を勤める傍ら、妻・ゆふの協力で書道塾を開き、平成四年に八十九才で天寿を全うする直前まで筆を執り続け、戦後の約五十年間に教えた子弟は、子供から大人まで約八千人にのぼりました。「ええ字はな、見でのある字・なんやぞ」

この飛騨の人でなければ旨く理解できない「でのある」という絶好な言い廻しを父親から伝授された飛洲は、「見飽きない書」「飽きられない書」「だれにでも好かれる書」を端的に表わすには、「見でのある字」が一番ぴったりする言葉だとして、自分が目指す書も「奇を

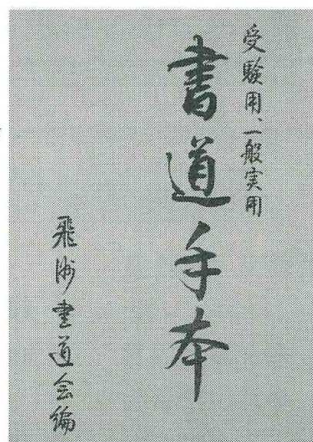
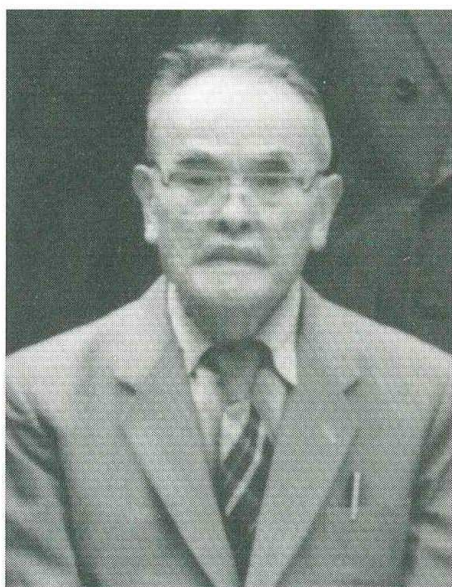
書も「奇を

銜らわれない、品位品格の見飽きない書」を終生追求しました。

飛洲の書道教育のなかで特筆すべきは、初心者向けの「実用的な書」から、小・中学校の書道教師向けの手本になる古典の臨書や書道史などあらゆる「書」を網羅して、一冊の手本にまとめた『書道手本』（B4判・四十五頁）を自費出版したことです。

日展会友・故小笠原富堂氏（絃州の書の師）は、贈られた『書道手本』を手にして、「地方の書道教師が、独学でこうした手引書を出版するのは、画期的なことだ。私達書家も地域社会の書道教育にもっと眼を向けなければならぬ」と評価されました。

飛洲は、昭和五十七年、高山の書道文化の発展に功労があつたとして、高山市文化協会から「文化功労顕彰」を受彰しています。



飛洲著『書道手本』